

はじめに 一川の文化力をはぐくむ

9 回目をむかえた「川の日」ワークショップは、過去の水準をさらに抜きでる新しい到達点を見つけた。選考過程全体を通して、桑子敏雄先生はコメントの中で、水の文化・川の文化に着眼したのが今年の特徴ではないかと語られた。小生は、最後のまとめの中で発表と評価の流れ全体の中に見え隠れしていた川の文化力をはぐくみの6つのキーワードをすくいあげ、今後

に備えた。川の文化力の第1のキーワードは、生きとし生けるものみんなつながりあっているという発想。そのことは高校生たちが実践活動を通して「カワバタモロコのキモチになろう」「シジミからのお手紙を読もう」の言葉にあらわしていたように、人間と生物が相互に浸透しあうやわらかい関係のデザインへの気づきである。

第2は、わくわく&リーズナブルな発想。川にかかわる楽しい活動と、ものごとを筋道だてて考えるリーズナブルな発想の融合は、川の文化の育みと教育学習の質を高めることになる。

第3は、のんびりと地縁と志縁のネットワークをつむぎだすこと。川をめぐる地域の人々の地縁の関係に加えて、川・まちづくりへの多様な志の縁をもって集まる人々の動きをつなぎとめること。地縁と志縁が絶妙に結びあわせられると、トラブルをエネルギーにかえることにつながる。それが寝屋川の事例を通して確かめられた。

第4に、根気を楽しみつつ持続的な社会づくりに赴くこと。トラブルも楽しさも心から愉しみつつ、時をかけてコトを進めるやり方は、サステナブルな地域社会を育んでいく。

第5に、心のエコロジーを育むこと。イノチのつながりを求める環境エコロジーと、ヒトとヒトのつながりを大切にする社会的エコロジーと、川や生命はどこからどこへいくのかへの想像力を養う精神的エコロジーの3つをつなぎとめるココロの柔らかさ、美しさを実践活動を通して育んでいくこと。

第6に、ロジカルな考察とパトスの表現を結ぶこと。川をめぐる客観的状況を観察・評価する論理的取り組みと、劇や音楽など多様な生彩ある表現を通じて人間的感情を豊かに謳いあげる感動共有的取り組みは、川や地域のあり方をめぐる異質なアクターのコミュニケーションと合意形成の上に重要である。

この6つのキーワードは、頭文字をつなぎとめると「カワノココロ」という韻をふんでいることがわかる。子ども・若者・大人・専門家・行政それぞれが「カワノココロ」に敏感になっていく過程を育んでいくことが、日本の川の文化を豊かに培っていくことにつながる。これが明確となったひとときであった。

来年10回目をむかえるが、これまでをふりかえり多面的にレビューしつつ、次の10年に向けての展望を語りあえる場にしたい。来年の「川の日」ワークショップでは、これまでの参加者の方々はもちろん、さらに全国各地の新しい方々とお会いでき、川の文化の深層にわけいる機会をわかちあえることを期待してやみません。

2006年11月

「川の日」ワークショップ総合コーディネーター
NPO 法人まちの縁側育くみ隊代表理事
愛知産業大学大学院教授

延 藤 安 弘